2001年11月。放射線治療で1度は完治したかに見えたが、2008年に再発し、喉頭全摘手術を受けた。

社長としての重責を果たすために、何が何でも話せるようになりたい――その一心で、喉頭がんとシャント法の手術を同時に行い、以前とほぼ変わらない声を取り戻した。

経営者として采配を振るうかたわら、シャント法普及のためのボランティア活動に力を注ぐ岩瀬さん。人生で積み重ねてきたことのすべてが、現在の活力の源になっているという。

「病気になる前は、小さな会社を大きくするために、仕事に没頭してきました。発病後は、声を失った皆さんに喜んでいただきたくて、悠声会の活動に取り組んできました。今の自分があるのは、いつも『前進あるのみ』でやってきたから。その積み重ねがすべてプラスに働いて、1歩踏み出すための原動力になっている気がします」

出世街道を驀進し54歳で社長の座に

岩瀬さんが岳南建設に入社したのは1970年。工事部で現場を経験した後、30代半ばで本社の営業部長に就任した。

「送電線設備は人里離れた場所に作るのが普通なので、現場にいたころは、山中で共同生活をしていました。現場監督といえども、高所作業では、作業員と一緒に鉄塔に上らないといけない。120mの鉄塔にも、平気でスイスイ上ってましたね」

5万分の1の地図に記載される送電線設備は、いわば日本の経済成長を支える〝大動脈〟。「地図に残る仕事」をしていることに誇りを感じ、岩瀬さんは仕事にのめりこんだ。

「北は北海道から南は九州まで、私がかかわった送電線設備は日本全国にあります。まさに人生のメモリアルという感じで、感慨深いものがありますね」

39歳という若さで取締役に昇進し、広島支店長も経験。代表取締役社長に就任したのは2001年6月、54歳のときのことだ。

企業人として出世街道を邁進し、ついにトップに上りつめた岩瀬さん。その直後に、厳しい試練に見舞われようとは、全く予想もしていなかった。

実際、現場で活躍している送電線建設の会社の方たちとの懇親会の様子。岳南グループは岳南ホールディングスを持株会社とする全9社によってグループを形成している

頂点で喉頭がんになり放射線治療を行う

社長就任から5カ月後の11月。久しぶりにカラオケに繰り出したが、高い声が全く出ない。のどに違和感を覚えて、近所の耳鼻科を受診したところ、大病院で診てもらうよう担当医に勧められた。地元の横浜市民病院で精密検査を受けたところ、診断は「初期の喉頭がん」。

「文字通り、『がーん』という感じでしたね。ただ、『今すぐに放射線治療をすれば、治せます』と先生に言われたので、あまり心配はしませんでした。むしろ、心配だったのは会社のことです。自分には、500人弱の社員とその家族、協力会社に対する責任がある。『今、会社を辞めるわけにはいかない。早く仕事に復帰しなきゃ』という思いで一杯でした」

翌02年1月～3月、横浜市民病院で、リニアック（線形加速器）による放射線治療を受けた。66グレイの放射線を照射したが、幸い火傷などの後遺症もなく、治療は順調に終わった。

がんを克服して仕事に復帰した翌年、岩瀬さんは経営者として一世一代の勝負に出る。M&Aで9社を合併し、持ち株会社の岳南ホールディングスを設立したのだ。これにより、送電線建設や電気設備、防水・塗装、土木・建築などの企業を傘下に持ち、ITソリューションやFC事業なども手がける岳南グループが誕生。その総帥として、岩瀬さんは大いに辣腕を振るうこととなる。

幸い体調も良好で、治療から